生薬学１実習　「今年もやります！～屠蘇散（とそさん）～」

実施日：2013 年 12 月 20 日（金）
場所：関西大学 第４学舎３号館 3403 教室
対象：関西大学化学生命工学部「生薬学 1」および「生薬学 2」履修者

大阪薬科大学配信科目「生薬学 1」および「生薬学 2」の担当者である芝野真喜雄先生より、「屠蘇散を使った本来のお屠蘇を元旦に飲み、長寿と健康を願って新年をお祝いしましょう」との昨年度から開始された大好評の企画で、大阪薬科大学の学生だけでなく、関西大学の「生薬学 1」および「生薬学 2」の履修者に向けても屠蘇散の生薬が贈られました。

屠蘇散とは中国の後漢時代の名医華佗（かだ）が考案した処方で、日本には平安時代に伝わり、やがて宮廷から民間に広がり、お屠蘇を飲む風習は「福寿を招く」縁起のよいお正月の伝統行事になりました。しかし現在では元旦のお屠蘇を清酒のみで代用する家庭も多くなり、ほとんどの学生が屠蘇散を知らないことに憂慮された芝野先生が「日本の古き良き伝統をもう一度見直してもよいのではないかと」と企画されました。

古来の屠蘇散の処方に含まれる附子や大黄など作用性の強い生薬を除き、基本の生薬（桂皮、白朮、陳皮、防風、山椒）以外に独自ブレンドとして甘草、桔梗、茴香、丁子、紅花などを加えた 10 種類が用意されました。風邪の予防に体を温める生薬や、血行を良くする生薬、健胃作用のある生薬などが解説されました。本来の屠蘇散は散剤ですが、今回は刻みのため各生薬の量を多めにした約 5g をお茶袋に入れて大晦日の夜から一晩、一合（180ml）くらいの日本酒のみ、本みりんのみ、または 1:1 の比率で日本酒と本みりんを配合して浸漬し、元日に頂いて下さいとのことでした。多めに入れると美味しくなる生薬や、入れ過ぎると返って美味しくなくなる生薬に関する注意を芝野先生から聞きながら、受講生たちは各自の好みの生薬を配合し、封筒に入れて持ち帰りました。元旦は自家製のお屠蘇で家族団欒を楽しむことでしょう。